

草原変じて

遠い夏、我家の庭に咲く大きな向日葵ひまわりを見て、隣家の主人が嘆息した。

「私はその花に、非常に辛い思い出があらましてなァ」

父が耳を傾けると、相手はシベリア抑留の経験けんけんを語ったという。向日葵ひまわりを愁うれうのは、当時飢えを凌しのぐため、種を煎いって塩味で食べたかららしい。

秋になって花卉が落ちると、我家でもそれを真似てみた。なかなか芳かうはしく、決して不味くはなかった。だが、極寒の收容所ライケリで、それが毎日となると辛つらからう。お負おけに主食も乏はしいと想像すれば、彼の筆舌に尽くしがたい苦勞が偲おもはれたものだ。

さて、シベリアの南方、蒙古高原やゴ

塚本 青史

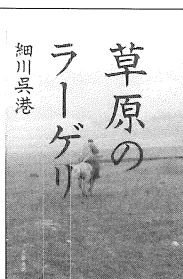
ビ砂漠から満州の平原といえは、歴史的には匈奴こつと、鮮卑せんひ、柔然じゅうぜん、突厥とつこつ、回鶻かいこくなど古来遊牧騎馬民族の跳梁跋扈ちやうりやうはくこで知られる所である。

彼らが脅威として名を留めるのは、主に漢民族との関わりからである。騎馬民族の猛々しさを剽悍狡猾ひょうかんこうかくなどと評するのも、漢民族側からの視線、つまり記録である。

古代におけるそれは、司馬遷著『史記』の匈奴列伝や大宛列伝に詳しい。そして趙世家ちやうせいかには、武靈王が匈奴と対抗するため、中国史上初めて苦勞の末に騎馬軍団を組織する逸話まである。

始皇帝が完成させた万里の長城も、双方の摩擦を端的に表す遺物といえる。長城は侵略と撃退を物語るように、破壊と

細川呉港著
草原のラーゲリ



四六判 472頁
文藝春秋 [2600円]

修築が繰り返され、現在我々が目にするのは明朝時代に落ち着いた物だ。当初の物より、かなり南へ押し戻されているらしい。漢民族が、騎馬民族の力に屈服していったのだろう。

その、別の証左でもあろうか、匈奴へ入った者の話は、暗さや悲惨な状況をもつて語られることが多い。

前漢文帝時代の宦者中行説ちやうせつは、降嫁した公主（皇帝の息女）に随行して匈奴の地へ行ったが、左遷同然の身を恨んで、単于（匈奴の大王）へ漢に不利な進言を重ねている。

また、同じ前漢の武帝時代、大月氏たいげつしへの使節として西方へ向かった張騫ちやうけんは、

その途上と帰路に匈奴に拉致されて、合計十一年も捕虜生活を余儀なくされた。

そして、雁書（がんしよ）の故事を残した蘇武（そぶ）は、匈奴の地で紛争に巻き込まれ、十九年も抑留の憂き目を見ている。

また、同じく前漢の細君（さいくん）は烏孫（うそん）へ、王昭君（わうしやくくん）は匈奴へ、そして唐時代の文成公主（ぶんせいこうしゆ）はチベットへ、それぞれが当時の朝廷の都合で嫁いでいる。彼ら及び彼女たちにも、計りがたい苦節の時間があつたことは想像に難くない。

しかし、我々が彼ら（彼女たち）の不運や悲恋を語るとき、そこには遠い古代の浪漫として、牧歌的に捉えてしまうくらいがある。

つまり、それぞれは悲劇なりにも、主人公たちが個人的には歴史に名を残せて、一己の人生においては成功譚（せうこうたん）として見えるからだ。

また、決定的なことは、我々が彼らと直接歴史を共有していないからであらう。時間的な縁遠さや時代の隔たりは、日常的な泥臭さを消してしまう。それゆ

え、彼らを絵葉書同然に美化してしまうのだ。

さて、『草原のラーゲリ』の主人公ソルジャブは一九二五年、後に満州国へ編入される中国領黒竜江省内に生まれたモンゴル人である。

年齢的には、私の父や隣家の主人と同時代ということになる。

そういう意味で我々とは、現代史の一齣（いちく）を共有している同時代人だ。それゆえ彼の体験は、一種の皮膚感覚を伴って訴えかけてくる迫力があつた。

彼は成長するにつれ、日本の学校へ通うようになる。日本の中国侵略は非難されてしかるべきであるが、都市のインフラ整備や鉄道の敷設、教育制度の拡充は瞠目すべきものがあつたようだ。

ところが、日本の教育指導がしつかりしていたことと、ソルジャブの優秀な成績とが、あろうことか、後に彼の不幸を呼ぶ。

我々日本人は、四方を海に囲まれてい

■【映画】胡同の理髮師

胡同の一角に暮らす93歳の老理髮師の毎日を描くエッセイ・リポートで描く。

▼ハスチョロー（ハス朝魯）監督・ラン・ピン（冉平）脚本・チン・クイ（靖奎）、チャン・ヤオシン（張耀興）、ワン・ホンタオ（王洪濤）ほか出演／北京經典人文文化傳媒有限公司製作／2006年中国／1時間45分▼2月9日より岩波ホール（東京）で公開。

*東方書店にて前売券（一、五〇〇円）取扱中。（札幌・名古屋・大阪・京都・福岡にて近日公開予定）URL: <http://futon-movie.com/>

■中国陶磁名品展

元・明・清時代の景德鎮窯作品を中心に、後漢時代から清朝までの中国陶磁の名品約50件余りを精選展観。

▼4月20日(日)まで▼10時～17時（入館は16時30分まで）▼松岡美術館2階展示室4（東京都港区白金台5-12-16／東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線「白金台駅」1番出口から徒歩6分）▼毎週月曜日休館（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日が休館）

▼一般八〇〇円／中高大生五〇〇円▼問合せ ☎03-5449-0251 / URL: <http://www.natsuka-museum.jp/>

た関係で、ほぼ全国民が民族、言語、風習を一にしている。それゆえに、ソウルジャブのごとく、個人の人種と国籍や教育が、一つの主権国家のもとにない事例とは、あまり馴染みがない。

しかし国境が地続きの大陸では、彼と同様な状況を抱える人々は無数にいたことであろうし、現在も限りなくいよう。

一九四四年、ソウルジャブは満州国立ハルビン学院を卒業して、満州国興安北省、省公署に就職する。おりしも宗主国日本は太平洋戦争の最中であり、満州国はソビエトやモンゴルと国境を接している外交は活発だった。

彼にとって、専攻したロシア語とモンゴル語、日本語を駆使するには正に檣舞台で、格好の戦場になるはずだった。しかし、翌年原爆を落とされた日本は瀕死の重症患者のごとく倒れて、ソ連と外モンゴル軍が満州への侵攻を開始する。

このときの不意討と満蒙開拓団の悲惨な状況は、中国残留日本人孤児問題とともに取り上げられ、体験者から這々の体

で引き揚げてきた苦勞を聞かされる。その一端が、冒頭のシベリア抑留の後日譚であり、本書中の兵士に扮して夫を捜す日本人妻なのだ。

しかし、当時満州の中枢部に籍を置いていた外国人の、その後と言及した書物は日本にはほとんどなからう。

『草原のラーゲリ』はそういった点でも珍しく、主人公の軌跡が波瀾万丈で興味を惹かれる。

同年、モンゴルのウランバートル党幹部学校へ留学したソウルジャブが、二年後卒業と同時に身に覚えのない反革命容疑で逮捕されるのは、満州国での経歴からである。

ちよつと真剣に調べれば、彼の無実は明らかだが、モンゴルの取調官はソウルジャブよりも知的レベルが格段に低かった。だから、一種の嫉妬から彼を罪に落としたようだ。

戦後の満州は中国領に編入される。それゆえ彼は、一九五四年に、母国への送還という形で内モンゴル自治区のフフホ

トへ入るが、中国政権下でも重罪犯の烙印を捺されて収監される。更なる苦痛を強いられたわけだ。そこにあるのも、知的レベルの差だった。

知識人への反目は、無教育や無教養が生む劣等感である。それが数を持めば、集団ヒステリーの魔女狩りになるのは、洋の東西を問わない。文化大革命も、ポルポト政権の大量虐殺も、同じ轍を踏んでいるようだ。

私の大叔父（外村吉之助）は、当時滋賀県の田舎に珍しいクリスチャンだった。だが、周囲の村人たちから「吉つあんは、耶穌やからきつと共產主義者や」と、全く理屈に合わない風評を立てられたと聞く。

特別高等警察は、さすがに共產主義が宗教を認めないことを知っていたらう。だからこそ迂闊に動かなかつたが、ソウルジャブの冤罪は、そのことを彷彿とさせる。

彼はフフホトから青海省の西寧へ強制

労働に移動させられる。そこで活版印刷に従事することになるが、彼の服役態度とは別に、その間にも中国当局の内部も変動していった。

一九六五年、彼は仮釈放されて一時フフोटやハイラルへと帰郷するが、その後ツアイダム盆地に追放される。個人の希望や意志を無視するようなことは、文化大革命^{たぶんわ}の中国では日常茶飯事であつたようだ。

蔣介石^{ちやうかいしやう}政権下で青年団に入っていた者はタクラマカン砂漠の開拓をさせられ、上海の教会付近に住んでいた者は、青海省の集団農場の強制労働に従事させられたと言われている。ソ連でも沿海州にいた中国人が、中央アジアへ強制移住させられた事実がある。

ソルジャブは屯田兵のような生活を送るが、従容として馬を飼う彼の態度は、罪人というより、達観した求道者のような境地を感じさせた。そのような無欲の賜か、文化大革命の終結後、ようやく一九八一年に彼は名誉回復を果たし、晴れ

て罪人の汚名を返上できた。また、牧畜科学研究所に職も得た。

そこから彼は、ハルビン学院の同期生と連絡を取ろうとする。それは彼の、青春を取り戻そうとする、いわば現状復帰だつたと考えられる。

ソルジャブが覚えていたのは、実家が静岡県沼津市で幼稚園を経営していた青木襄児^{あおきじうじ}だつた。しっかりと所番地を書かぬまま出した便りは、それでも日本の郵政省が探し出してくれた。

彼は、レーニングラードで日本領事館総領事をしていたのである。さすが、ロシア語にかかわっていた強者^{つうじや}といえる。

そして調べると、彼以外の同期生も語

学を生かして外務省や商社で活躍していた。一期上には、ソルジェニーツィンの翻訳者^{うりやうしやうし}内村剛介^{うちむらこうすけ}がおり、またハルビン学院の特修生には、日本版『シンドラーのリスト』の杉原千畝^{すぎはらちうん}の名もあつた。

他にも信用金庫の頭取やテレビ朝日の取締役など、実に錚々^{そうそう}たるメンバーであつた。

ハルビン学院二十二期生の同窓生が一堂に会する場は感動的である。それは、彼らが、ソルジャブもそうであつたかもしれない、可能性の分身だからだ。その中であつて、ガリーナ・ポトスターピナと染谷茂のロマンスは、本書に盛り込まれた唯一の色彩効果である。

著者が言いたかつたのは、無論ソルジャブが恋愛に無縁だつたことなどではない。そして、無知や偏見が横行する共產主義社会の実態分析や告発でもなからう。また、主人公が受けた悲惨な収容所生活よりも、後々も時間に風化されなかつた『知の連帯』が、正に彼を本来の姿に戻したことだ。

一九八五年、彼はフフोटで日本語学校を創設し、九三年には、民主化した故国モンゴルでも同じ夢を果たして、日本語ブームをもたらしている。ここに本書(著者とソルジャブ)の、単に不遇を嘆くだけではなく、撥^{はね}条^{じょう}しようとする救いと温かみがある。

(つかもと・せいし 作家)